



→緑のカーテンのゴーヤとヘチマがまだ花盛りです。

満月に心の内を照らし見る

日常生活で芽生えた素朴な疑問、本やテレビ、ネットの情報に触れて関心をもったこと、お家の人との会話から興味を抱いたこと等を取り上げて追究した理科・社会科自由研究が、三年生以上の廊下に展示されている。大人でも結果が予測できない内容や、下書きや書き直しの跡を見るにつけ、奮闘した子供の姿が浮かぶ。夏休みの読書感想文や、一学期に書き始めた生活作文も読みごたえがあった。これらの課題は、今までに学んだ力がどれだけ定着し、生活に生かせるかを測るバロメーターにもなっている。

学校では、生活科や総合的な学習の時間を使い、身の回りに関心を払い、好きなことや課題を見つけること、仲間と協力して追究方法を考え、継続的・論理的に調べること、人の考えに耳を傾け、情報を整理して説明すること、さらには、問題解決に向けた行動や発信等を通して、目指す東っ子「がんばることをいとわず、追究し続ける子」の実現に力を注いでいる。その成果として、学



【劇に張り切って出演した六年生】

年を追うごとに自ら学びに向かう力が育つことを期待している。さて、九月十七日は、劇団「うりんこ」さんによる「ともだちやーあいつも友達ー」を全校で鑑賞した。本作品は、内田鱗太郎さんの絵本「おれたち、ともだち！」シリーズの一冊を原作とし、脚本・演出をアレンジしている。歓声や笑いが起こる中、友達付き合いについて、日常に起こりうる困ったシチュエーションや、そのつもりがなくても相手の気持ちを感じないがしろにしている行動を見つめ直すとともに、友達のよさを味わえる教育的価値を備えた演劇である。そして、三人の役者さんの情熱が伝わってくる素晴らしい演技であった。

観劇に先立ち、団員さんによるワークショップを上学年が受けた。「演劇には何が必要か」というテーマの下、「ペアの相手を見えない糸で操る」「隠していた悪いテストが親に見つかった場面を音声なしで演じよう」等のお題に、子供たちは身振り、表情、力の入れ具合を工夫して演じることを楽しんだ。この体験から子供たちなりに演劇に必要なものに思いを巡らせた後、団員さんから「想像力」の大切さを教わった。これは、演目「ともだちや」のテーマに通じるものである。

ワークショップの学びを基に、六年生十人が劇にエキストラとして出演した。そして、「本番は練習以上に演じられていました。彼らにはこうしたいという意味があります。それを出せることが素晴らしい」と団員さんに褒められた。実際に目にした演じぶりに、誉め言葉通りだと私も納得した。安心して自分を表現できる仲間がおり、人の教えが心に響く子、その気になって行動できる子を誇らしく思った。



【ワークショップでの身体表現】